

QOLとは、クオリティ・オブ・ライフの略語で、「生活の質」を意味します。人間の尊厳と自己決定権を保ちながら生活し、人生の終末を迎えようという生き方や考え方のことです。

QOLという用語が用いられるようになった背景は、1970年代にあります。当時、ターミナルケアや障害者の自立支援運動の中で、身辺自立ができなくても他者の介助を利用して当事者が望む生活の質を確保することに目が向けられるようになりました。「ただ生きていればいい」という考え方から「人間らしい生活を送りながら死を迎えたい」という方向に価値観が変化してきたのです。

では、現在の日本でQOLが実現しているのでしょうか。私は「否」と答えざるを得ません。近年、核家族や単身世帯が増加し、独り暮らしを強いられる高齢者が600万人いると言われています。そして、年金などの収入を支出が上回り、貯蓄も使い果たした高齢者の「老後破産」が大きな問題になっています。このような状況下にある高齢者がQOLを求めることは不可能です。

また、QOLを推進するには国民の意識転換が重要です。QOLを追求するには、労力と費用が必要です。そして、社会の制度にまで具体化するには、国民一人ひとりが負担を分かち合うという意識も欠かせません。人生の終末は誰でもいつかは迎えます。そのとき人は独りでは生きていくことができません。私たち自身が「より多く」よりも「より良く」、つまり「量」から「質」に意識をシフトしていくことが大切だと考えます。